
ハナミズキ

草草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハナミズキ

【Nコード】

N2471Y

【作者名】

草草

【あらすじ】

ひどい頭痛に悩まされ、少し休もうと僕は神社に寄った。――
それが始まりだったのか、終わりだったのか。何にしても、僕はハッピーエンドしか認めない主義だからね。

× ×

まずは、謝らなきゃいけない。

なんでこうなったんだろう。その疑問は尽きることを知らない。

過去の私も、未来の私も、現在の私も、きっと誰も分からない。
誰が本当の私なのかも分からない。

本当に、皮肉なことなのだ。

きっと、これは誰も幸せにならない。私にだって救いなどはない。
私は、恨まれているだろう。

それでも私はこれを止めない。止める訳には、もう、いかなくな
ってしまった。

これは始まりなのかもしれない。

これは過程なのかもしれない。

これは終わりなのかもしれない。

始まりも終わりもなかったのかもしれない。それでも私は、終わ
りを望む。

終わるとき、果たしてこれはどうなるのだろうか。やっぱり皆に
幸せになって欲しいと思う私がいる。

これは本当に、身勝手なのだけど。

ああ、” 始め ” ようか。

4月 某日（？）

最近よく夢を見る。

目を開けると何かが積もって白くなった地面が見える。それであこれは夢か、いつも気づく。

地面が白いということは、冬の夢なのだろう。夢で暑さ寒さを感じたことはないから、寒くはないが冬なのだ。

僕はその雪の上にいつも横向きで寝ている。寝る姿勢によって夢の中でも姿勢が変わるのか実験してみたこともあったが、いつも同じ姿勢だった。

最初は白い雪しか見えない。立ち上がって周りを見たいという衝動にかられることもあったが、それは叶わなかった。金縛りにあったように体は動かない。

しかし、ふと気づくと頭を動かせるようになる。明確な瞬間はないが、「あ、動かせる」なんて感じて気づく。そうすると頭だけが、わずかに動かせるようになるのだ。

頭を動かして見上げると、雪の積もった一本の木が見える。

太くてずっしりしたような木ではない。しかし立派に枝を広げて雪をその身に受け止めている。それがよく様になっていた。

もとから草木に関して詳しくはなかった。しかも葉が落ちた冬の様相の木だ。いくら調べても、せいぜい落葉樹ということしかわからなかった。

僕が木を見上げたところで夢は終わる。目覚めはそんなに悪くはない。だが不安に思うこともある。何度も何度も同じ夢を見るのだから、一つや二つ不安を感じても仕方がないだろう。逆に感じない

ほうが変だと思う。

見る度に生々しさを増す、その夢。夢は何かを暗示しているのだろうか、それとも過去の記憶をぶり返しているのだろうか。だが生憎過去にこのような経験をしたことはない。何も意味を持たないということもあるだろう。

漠然とした不安を抱えていくことに、僕の感情はまだ追いついていないようだった。

4月 某日 (???)

目眩がする。

思えばこんなことは初めての経験だと思う。

目眩、吐き気、頭痛。そのどれもが今まで自分には関係のないことだった。

目眩とはどのようなことなのか。吐き気とはどのような気分なのか。頭痛は本当に頭が痛くなるのか。とにかく、現象そのものが全く想像出来なかった。

頭痛持ちの兄には散々恨まれた。自分はこんなにも苦しんでいるのに、なぜお前は分からないのかと。僕が困惑気味にごめんなさいと言うと、兄は決まって優しく笑いながら僕の頭をなでた。それはお決まりのやりとりであり、兄は楽しんでさえいた。だが僕にとって、兄を苦しめているものを理解できないことが心底悔しかった。

ふつと意識が何かにもつていかれそうになる。くらくら、という表現を使うのがもつともなのかもしれない。だからきつとこの現象が目眩なのだ、と理解ができた。

目眩が起きると、僕はしばらくぼーっとしているらしい。声をかけても無反応のようだ。もちろん人から聞いた話だ。僕には全く自覚がない。

目眩の後、僕の頭にはいつも何かしらの記憶が残っている。それは画像であつたり香りであつたり、僕の体の全ての五感でそれは残っている。

しかし大概その記憶は一回につき一つの器官でしか残っていない。画像なら画像のみ、香りなら香りのみ、というように。

そのためなのか僕は未だにその記憶の全貌を知らない。

もしかしたらそれは記憶ではなく、ある一つのイメージを示しているのかもしれない。

そのイメージによるタイムラグの為に、僕はしばらくの間反応が出来ないのだと思う。

そんな僕を友人はお前なら仕方がない、と笑って言う。

実際僕は色々妙な人間だと思う。他人からそう指摘されるまでもなく、自分でもそれだけは自覚していると目眩以外では自負している。

まず野菜を食べない。これは自分でも呆れることだ。

ピーマンが嫌い、ニンジンが嫌い、そういうことではない。野菜全般が嫌い、というより食せないのだ。

僕が分からない位に形状や味が調理されているもの、例えばハンバーグのタマネギなんてものなら食べられる。だが野菜ジュースのように形状がなくても、色や匂いで分かるものは見るのも嫌だった。それこそ口に入れば吐き気、というのが分かったのかもしれない。だが野菜と僕が判断してしまったものは、口に入れることさえ出来なかった。

野菜を食べないと健康でいられない。長生き出来ない。だから食べなさい。周りの人間は僕が飽きるほどそう教えてきた。

これまで生きてきたのだから、これからも生きていけるだろう。皆が僕を心配して言う傍ら、僕はいつもそんなことを考えている。もともと長生きしようと思ってはいない。お決まりの台詞はいつも相手を困惑させて終わるのだ。

付き合いが長い人間は、誰もこのことについて僕に触れることもない。時折思い出したように親が言うだけであった。

物覚えも悪い。特に人の顔と名前が一致しない。いつも一緒にいる友人ならわかる。担任の先生くらいも。だが後はダメだ。

どんなに仲が良くても、クラスが離れてしまえば一年で忘れる。廊下ですれ違っても分らないし、何より相手と過ごした時間の記憶さえ時にはない。全く、薄情なものである。

その原因については心当たりがある。兄だ。
僕は兄の顔を知らない。覚えていないのだ。

兄は僕が小学生のときに死んだ。両親もとも交通事故で死んだらしい。確証がないのは僕自身に覚えがないからだ。

家族で出かけたときに乗っていた車へ大型車が突っ込んだ。それで、死んだ。

僕だけ助かった。僕だけ乗らなかった訳ではない。文字通り、その状態で僕だけ助かったのだ。

外傷は特に残らなかった。しかしこのように事故に関する記憶は消え、兄の顔を失った。両親の顔はこれでもかというほど覚えているのに、何故か兄の顔だけ、だ。

随分薄情だと思うのだが、周囲は事故のショックということで哀れみの目を向けた。それは煩わしいことこの上なかったが、適当に黙っていても勝手に一人で自己解釈して終わってくれる。だから一方では楽だった。

こうして僕は一人になった。

不幸にも、親戚といえる親戚はいなかった。どうにも早死にをする家系らしい。そのことに僕が気がついたのは、皮肉なことに家族の死がきっかけだった。

思い返せば従兄弟、叔父叔母、親戚。その言葉のどれとも疎遠だった。祖母や祖父なんかに会ったことはない。

お年玉をくれる人の人数など気にしたこともなかったが、同年代の子と比べれば差は歴然としているのだろう。兄も自分も随分損を

したものだ。

一番にお年玉のことなんて考えたのは、自分でも意外にショックに思ったからかもしれない。友人に言ったら「お前の感覚を分かれと言われても無理だ」と僕の”ショック”という解釈に不平を言っていた。

事故自体を記憶していない薄情な僕な訳だが、それには僕自身疑問がある。

本当に事故だったのか、という点についてだ。

事故ではないのだったら、何だと言うのだろうか。もちろんあの状況は事故以外の何物でもないことは確かである。

だが何かがしっくりこない。まるで形の合っていないパズルピースを、ぎゅうぎゅう、と無理矢理はめているかのような違和感が付きまとうのだ。

自分に記憶がないから人から伝えられることに違和感を感じるのは仕方がないことであり、それは当然の反応である。人はそう解釈するようだが、僕にとってそれは受け入れがたかった。

一番は僕が事故を思い出すことなのだろう。事故の状況を、兄の顔を思い出す。百聞は一見にしかず、というわけだ。

だがそれが出来れば苦労しない、という話。

事故の記憶は事故によって偶然に消えたのか、意図的に自分で消したのか分らない。だが僕はどちらかと言えば前者だと思う。

つまり、事故の作用によって消えたのなら、僕が今でも人の顔を覚えないのも納得がいくというものだ。きっと脳のどこか、人の顔を覚える場所なりを損ねたのだ。

そう解釈してのうのうと生きていけるならそれに越したことはな

い。前者と言い切ってみても、やはり自分の中のよく分からない部分が納得を許さない。

結果として結論は堂々巡りを繰り返し、再度僕は同じ問いに挑み続けるのだ。このまま一生共に歩んでいきそうだな、その問いに。

ひどい目眩がした。

4月22日 午前10時03分

「狩野^{かりの}？」

また目眩があつたらしい。残る感触は、鈍痛。とても不快だ。心配そうなタカの声に、何ともないように片手をあげて答える。しかし慚然とした声が直ることはなかった。

「また目眩か？最近ホント多いな。お前は健康だけが取り柄なのに」

「うるさい。ほつとけよ、タカ」

「ばーか。俺がお前をほつといたら誰がお前の面倒見るんだよ。ただでさえお前友達少ないのにさ」

「少なくて結構、大きなお世話。…タカがいるならいいよ」

そう言うたタカは何とも言えないような表情をした。怒っているようにも見えて、あきれているようにも見える。どっちも、という表現が正しいのだろう。

「またそういうこと言う。いい加減その人間嫌い直せ。狩野の親御さんになんて顔すりゃいいのさ」

「もう一生会わないんだから心配するな」

そついう問題じゃないだろ、と言いたげな表情。僕には情けないようにも見えてしまう。

格好をつけたがる年頃のようなが、気の良い友人はがさつに成りきれていない。所々で若干女々しいが、それも愛嬌だろう。

タカだけは僕の気分を害さない。とても好ましい存在だ。それを本人に直接言ったことはないが、言えば余計に心配されるのがオチだろう。唯一の友人にそんなことをさせるのも億劫である。

「あんまりひどいようなら保健室に行けよ。お願いだから自分のことをどうでもいいとか過剰評価するな。俺の寿命が縮まる。家にも早く帰れ。部活も出なくていい。俺が言っとくから」

分かったなと念を押されれば黙って頷くしかない。タカは疑いの目をむけながらも、ようやく安心したようだった。

休み時間終了のチャイムが鳴る。タカはもう一度僕に念を押すと自分の席に戻っていった。

僕はひらひらと軽く手を振ってタカを見送る。そして胸の内で溜め息をついた。

家に早く帰れというが、それは何とも気が滅入ることだった。

今の僕にとって、帰るべき所と言える家はタカの家だ。親戚も何もない僕をタカの両親は引き取ってくれた。

昔から家族ぐるみで仲が良かったとはいえ、赤の他人も同然である。元から子供が三人いたと思えばいいのだから気にしないでくれと言うが、これのどこが気にしないでいられるのか。残念ながら僕はそこまで脳天気な性格ではない。

中学を出たら家を出て、働くつもりだった。しかし保護者代わりの人に反対されればそれも出来ない。せめて高校生になったらアルバイトをして生活費を出そうと思っていたのだが、学生の本分は勉強だからと、それも許してはもらえなかった。このままではきつと

大学まで行かせられる。

僕は元より人に頼ることをしたくない質なのだ。人に弱みを見せたくない。それなのに、今の現状では頼ることしか出来ない。

なんとも居心地が悪い。窮屈だ。

もちろんタカの家族には感謝している。おじさんもおばさんも実に甲斐甲斐しく世話を焼いてくれるし、タカのお兄さんも本当のきょうだいのように接してくれる。僕に不満そうな顔を一度として向けたりしていない。

こんなことを言う僕は随分身勝手に見えるに違いない。独り善がりだと。子供だと。十人中十人に攻められてもおかしくはないと思っっている。

そんな僕を戒めるわけでもなく、温かく見守ってくれさえするのだ。おちおち捻くれでもしたら、きっと僕の両親の墓の前で泣くくらいするに違いない。下手な脅迫より、よっぽどそのほうが僕には堪えてしまう。

いつそ蔑んでくれればいいのに、と思わないではいられない。その優しさは僕をいつまでも苦しめる。

僕に家はない。

タカの家はタカの家だ。もうあの家で寝起きた回数は数え切れないほどになるが、僕の家ではない。紛れもない人様の家に過ぎない。

実を言うと、もう自分の家の記憶など掠れてきている。家を想像すると、どうしてもタカの家が一番に思い起こされるのだ。それは僕をひどく空しい気分させる。

詰まるところ、ただ自分の家を、家族を忘れたくないだけなのだ。それらをまるつきり過去の遺物として扱いたくないだけ。

過去の良い思い出としての位置を僕はそれらに用意していない。

何もかも忘れてタカの家族になることは、到底不可能なことなのだ。
タカの家族の迷惑になるのだけは御免だった。結局僕の残された
道と言えば、健康に何事もなく日々を過ごすことである。

タカには悪いが、家に早く帰ることだけはしたくない。授業が終
わったら少し散歩をしながら帰ろうと心に決めた。

4月22日 午後04時30分

兄は優しい人だったと思う。

歳は離れていた。その分歳が近いきょうだいのような交流はなかった。どちらかといえば、父親に近かった。

よく、体調を崩していた。自分では隠しているつもりらしく、実際両親は気がついていなかった。だが僕はその辺は目ざとく、兄の異常に気がつくのはいつも僕が最初だった。それがとても誇らしかった。

春のことだ。

いつの春だろう。正確には分らないが、春だった。いつにも増して兄の体調が思わしくなかったのだ。

学校が終わったら早く家に帰るように言ったのに、僕の言うことなんてろくに聞いてはくれなかった。それが僕にはひどく悲しかった。

兄は絶対に僕の前では弱音を吐かない人だったから。両親にもできつとそこ何も気がついてなかった僕とは違って、兄は両親に出来るだけ自分のことでは心配をかけさせたくなかったのだろう。今になってそう気づく自分を、思わず叱責する。

そう、春だ。何故こんなにも僕は”春”に引っかかっているのだろう。春が何だというのか。

春。それも暖かい日が、すでに日常になってきた頃。

兄の体調がとても悪くて、帰りが遅くて。僕と出来るだけ距離を保っているようにあのときは見えた。

頭をなでられる感触。久しぶりのその感触に嬉しくなった。どれだけ近づいても離れていってしまったあの頃、本当に嬉しかった。ああ、また兄は自分を構ってくれるのかと、見捨てられずに済んだ

のかと。

思案しながら道なりに歩いていると、交差点に行き着いた。そこは車の往来が激しくもないのだが、小学校の通学路でもあるので、何年か前に信号機が設置させられた。こんな田舎のこんな所に、信号機。当時、地元の人からは一つのネタにされていた。

その信号がちょうど黄色から赤色を示す。車が右から左へ走り去るのが見えた。

——車。

そしてどこかに出かけるとい話が両親から出た。

車に乗った。暖かな日差しだった。春、だ。

いや、待て。車に乗るなんて、特別でもなんでもないではないか。何故そこを強調している？

いつの間にか信号が青に変わっていた。僕は大した感慨もなくのろのろと動き出す。通り過ぎた車は結局あれ一台だった。信号を無視してもいいくらいだったな、と思いながら律儀にも守ってしまっただ自分に苦笑する。

——交通事故。

あの事故は春に起きたのではなかったか。

そうだ。兄の体調が特別に悪かった、あの春だ。

思い出した。思い出したというのに、何故僕は安堵ではなく不安

を感じているのだろうか。

なでてくれて、仲直りの記念に家族で外食でもしよう。そのまま車に乗り込んで、そしてその後車は――。

嫌な予感がして思わず立ち止まった。冷や汗が止まらない。通行人は幸い誰もいない。不審に思われずに済みそうだ。

僕は無意識に目を瞑っていた。それに気がついて、改めて強く目を瞑る。何かに耐えるように握っていた拳はどこか汗ばんでいた。

―― 思い出せ。

車は。

―― 思い出せ。

後部座席だ。隣には兄が座っていた。

不意に手に何かを感じた。見てみると兄が手を握ってくれていた。あまりに突然のことで、嬉しかったが何となく恥ずかしくて適当な文句を言おうとした。兄はただ優しく笑うばかりで、居心地がとても悪かった。

そんな僕たちの様子に両親は苦笑を漏らした。

―― 思い出せ！

兄が何かを呟いた直後だ。僕が上手く聞き取れなくて、兄に聞き返す前にそれはやってきた。

すごい衝撃だった。何が起きたか全く僕は理解していなかった。

いや、誰も理解はしていなかっただろう。それくらい突然のことで、あつという間のことだった。

そんな中、僕は何かとても安心感を得ていた。体に伝わってくる心地の良い重さが何とも言えず、その感触に意識も何もかもを預けていた。

いくらかもしないうちに、耳から入る雑音に気がついた。そして、ぼんやりとした思考で微睡みから目を開けた――。

目眩に襲われて傍らのブロック塀に片手をつく。残る感触は、今までに味わった物全て。とても立ってはいられない。僕はそのままずるずると地面にへたり込んだ。

いつの間にか鞆が地面に落ちており、手には全く力がこもらなかった。拳を握ることも出来ずにただ呆然とコンクリートを見つめる。

なんということだろう。

「兄を殺したのは、僕か？」

我ながら何とも途方に暮れたような眩きだった。

4月22日 午後05時10分

田舎、と言ってしまったえばもつと田舎に住んでいる人に怒られてしまつかもしれない。それくらい微妙な所。それが僕の住んでいる町。電車に乗ってしまったえわずかな時間で都会に出られる。そのお陰で不便さを感じたことはない。結構恵まれた町だろう。

特に目立った特産品もなく、地味な町だ。自然が残っているなどと謳ってみても、ベッドタウン化している今、田圃や畑なんかは徐々に姿を消している。それでも中心地を外れればいくらかでも田舎の風景が広がっているのだから、上等なほうである。

中心地から外れて田んぼが目立つようになる辺りに、小さな神社がある。梨畑と家に挟まれた緩やかな坂道を通らなければ、そこには行けない。

その神社は周りをぐるっと森に囲まれている。鬱蒼とした、という形容詞はあまりにも似合わない。それくらいよく手入れをされている森だ。それでもその森によって神社は外界から孤立しているようにも見える。

神社には申し訳程度の遊具が置いてあった。鉄棒に滑り台、本当にそれしかない。だが少し広めの広場があるので、そこで子供たちは遊ぶ。といってもサッカーや野球をするような広場ではない。何事にも中途半端な場所なのだ。

そのために最近その神社を使用する子供はまずいなかった。昔は毎日のように子供がやってきて遊んでいたはずだったが、僕が小学校に入学した時分、近くに大きな公園が出来た。自然子供たちはそちらで遊ぶようになったのだ。

だが僕は割とこの場所を好んでいた。遊具はそれしかないが、孤立した空間がまるで秘密基地のように思えたのだ。

そのことを思い返ししながら、僕は不意に誘われたようにその坂道を登った。

学校帰りでひどい頭痛にすっかり参っていた。家はもう近いのだが、このまま帰るわけにはいかない。どこかで休もうと思ったときに、この神社の存在を思い出した。

神社はどこかしこもぼくの記憶の通りにひっそりとたたずんでいた。まるで月日を感じさせない。この場所だけ時間から切り離されたようだった。

色の薄れた鳥居も、ペンキの剥がれた遊具も全てそのままだった。なんだか思いがけず懐かしくなって溜息が漏れる。

誰もいないようだったのでほっとする。別に誰かがいても構わないのだが、今は一人になりたかった。

とりあえず座って休もうとベンチを探した。しかし、見回してみてもベンチが見つからない。記憶によれば青いベンチが一つだけがあった気がするのだが。

さては老朽化の為に取り除かれてしまったのだろうか。そこまで考えてはたと気づく。

確か本殿の裏に広場があるのだ。もしかしたらそこに置いてあるのかもしれない。僕の記憶の中には、確かにその広場の木の下にたずむベンチの姿があった。

さっそく本殿の横を通って広場にでる。広場の片隅に存在を主張する、一本の木。その、下。そこにベンチを見つけてほっとしたのも束の間だった。

先客がいたのだ。

女の子だった。その子はベンチに腰掛けてぼうつとただ前を見ている。僕の高校の制服を着ており、校章の色が青いから同学年だと

分かった。

知らない子だ。こんな所にいるのだから近所に住んでいるに違いないのに、全く見たこともない子だった。ましてや同じ高校だというのに。他の高校ならともかく、自分と同じ高校の人でしかも近所というのなら知らないはずがない。

不審に思っで見つめていると、女の子と目があつた。見つめていれば目が合うということにも気が回っておらず、驚きと気まずさで体が一瞬固まる。

女の子のほうは僕を一瞥すると、すぐにベンチの端に寄つた。空いた場所にばんぼんと手をつく。

座つてどうぞ、ということらしい。その仕草がやけに子供っぽくて、微笑ましく穏やかな気持ちになる。僕は促されるままにベンチに腰掛けた。

どうしようかと悩む間もなく、彼女は僕が座るのを見届けてから口を開いた。

「こんばんは？」

「…こんばんは」

「こんな時間に、奇遇ですね。どうかなされたんですか？」

「どうかなされてたんですが、直つたようです」

「それは良かったですね」

「……………何をしていたんですか？」

「何もしてませんよ。何かをしているように見えましたか？」

「見えませんでした。だから聞いたんです」

「ごもつとも」

そこまで話して、耐えきれずに二人で吹き出した。

とても、単調な会話。中学１年生の英語の教科書のようだ。”これはペンですか。はい、ペンです。”という、あの実に馬鹿げた文章のよう。

頭痛もいつの間にか治まっていた。いくら気分も良い。すっかり毒気を抜かれてしまった僕は、至って平常に言葉を発する。

「君、どこに住んでるの？同じ高校のようだけど、見たことないな」

「……世の中にはあなたが知らないことが沢山あるはずです。私のことも、その一つということですよ」

彼女は顔をしかめるでもなく微笑んで言った。その言い回しに僕は困惑したが、表向きには出さない。

素性を言いたくないのか。何故、という思いは確かにするが、まあ、好都合だろう。僕も自己紹介なんてものを積極的にしたいとは思わない。あの儀式は何となく好かない。”これからよろしく”という意味を暗に込めているあれを、僕は一種の脅迫のように感じてしまうのだ。

実は、僕は少々名前にコンプレックスを持っている。親がつけてくれた手前どうにも邪険に扱えないのだが、少なくとも男子につける名前ではない。タカなんかは「春生まれなのが一発で分かる」とこの名前を評価していた。そう評価されたところで、嬉しくともなれないが。

この名前のお陰で、人に名を告げることに抵抗を覚えてしまった。

自己紹介という儀式も煩わしいと思うようになったのも、おそらくこれのせいだ。

なるほど、彼女の申し出と僕の利害は確かに一致する。

「まあ、そういうのもありかもな。その線でいこうか。……確かに電車で相乗りした人と話はしても、名前までは聞かないしな。僕たちは今その場所が電車じゃなくて、神社なだけかもしれない。……じゃ、自己紹介しないってことでいい？」

「……面白い考え方ですね。とても気に入りました。では、こうしましょう。相手が聞いたとしても、答えなくても構わないということとで。相乗りした人に、急に話しかけられても困りますから」

「了解。ところでいつまで敬語？君、2年でしょ。俺も2年だからタメだよ」

「こういうキャラなんです。気にしないでください」

そこで沈黙が降りる。

名前を相手に聞かないということは、相手を自分に残したくないということだ。自分の名前を伝えないことも然り。なら、最初から関わらなければいい。それなのに彼女は僕を招き、話し掛けた。彼女の中には矛盾が存在している。彼女はそれに気付いているのだろうか。

僕の返し方が予想外だったのだろう。彼女の瞳は若干困惑気味だったが、すぐに笑顔の裏に隠された。しかし、それは僕に彼女の危うさを窺わせるのには十分だった。

どうしてここにいる？

どこに住んでいる？

どうしてそんな顔をする？

僕はそれ以上話し掛けるのを躊躇った。彼女は応えるかもしれないし、応えないかもしれない。今でも十分仮面を被っているように感じるが、質問したら最後、もう僕と話してはくれない気がした。声帯を震わせるという行為だけを、彼女はするのではないか。

彼女と話したい。いつの間にか芽生えていたそんな思いが、僕に沈黙を強制していた。

4月25日 午前11時14分

他人を犠牲にして生きることが何よりも疎ましかった。

我が身可愛さで結果的に他者を陥れて生をもぎ取る。その行為はどんなものよりも僕には劣悪に感じる。

どうしてそんなに生きたいのか分からない。死ぬときは死ぬ。生きる時は生きる。その過程に自分の手を加えて思い通りにしようという行為は、実に醜い。

もし自分がどうにもならない状況、例えば末期癌にでもなったら潔く死のうと思った。普通なら周囲の人が本人の意思など全く無視して延命を願うのだろうが、幸い僕にはいない。

そんなことを言いながら、結局その時になつたら命乞いをするに違いないと笑われたこともある。なら僕はそうならないように生きていこうと思った。その行為はそれほどまで僕にとっては嫌悪の対象なのだ。

一応認識を改めようと、それらの苦悩を描いた本を何冊も読んだ。しかし、ぼくが感じるのはいつも嫌悪しかなかった。

死にたいなら、さつさと死ねばいいんだ。

* * * *

教室の喧騒は、聞いていて心地よい部類に入る。

この喧騒は”自分”がそこにいない。”自分”抜きの会話。本人

が干渉さえしなければ、徹底的に”自分”という存在が排除されている、BGM。自分なんて世界のほんの一部、断片や破片であることを知れる。

それが今日は違う。嫌でも感じてしまう、自分への奇異な視線。視線が向けられているのは、今は彼らから隠された僕の手首。

安穩と過ぎていく彼らの日常には、こんな些細なことでも刺激になるのだらう。僕は彼らの視線に対して萎縮するでもなく、むしろ彼らの様子に微笑ましさを感じてさえいた。

隠すことも、ひけらかすことも特にしなかった。制服の袖口からちらりと見える、手首に巻かれた包帯へ僕は視線を向ける。

僕自身が注目されているのではない。その意味でこいつの存在にはとても興味が湧く。皆が話すのはこいつであり、僕のようにあつて僕ではない。僕の人柄なんかは二の次であり、むしろこいつが彼らの中ではすでに僕に成り代わっている。

——カタバミ。

葉がハートを形作っており、よくシロツメクサと間違われる植物。シロツメクサは丸い葉に白い線が入っている。見間違えようもないはずだ。

僕は昔から、何故カタバミがシロツメクサに成り代わっているのか不思議で仕様がなかった。人に知られることのないカタバミの名は、僕に特別な意味を感じさせた。

決して否定的にカタバミを見ることはなかった。ともすればカタバミは”偽シロツメクサ”ということにもなるのだが、カタバミが悪いわけではない。僕はカタバミが嫌いではなかった。

カタバミとシロツメクサ。まさに僕とこいつのようだと思った。

頬杖を突くのを止めて机に突っ伏す。あくまで視線を気にしていないように装ってみたが、さすがに疲れていた。

高校へは適当に入っただけだった。家から近くて、学力も敵っただけ。この制服にも、この教室にも、何の思い入れもない。友人と呼べる人も、タカしかない。

今まではせめてタカの家に迷惑をかけないようにしてきた。だが、今ではそのどれもがどうでもいい。この出来事にだって僕は自分からどうこうしようという気はおきていない。

いつそのこと、こいつが僕を殺せばいいのに。そうすれば、こいつが僕としてこの教室に残るのだろう。彼らの中に残るのは、こいつだけだ。彼らはこいつを僕と間違えるのだ。それは何とも滑稽な気がした。

突っ伏したまま、制服の上から”僕”を軽く押さえる。

奇異の視線を送る彼らに、僕の知らない所で逐一説明を施すタカの姿が目に見えかぶ。

もう、遅いよタカ。彼らは遂に、僕の存在を消してしまったのだから。

自暴自棄。こんな自分に、そんな言葉が脳裏を横切った。

4月25日 午後01時08分

目を開けると白が飛び込んできた。ああ、これは夢なのか。随分慣れたものである。僕は慌てず騒がず、じつとその時が来るのを待つ。そして十分時間が経った後、徐に顔を動かすのだ。

体が動かないことを認識させられることは、どこか恐怖感が湧いてくる。だから最近顔以外を動かすことを諦めていた。まるでプログラムのように僕はその動作を繰り返す。

それはいつもの夢だと思った。

しかし、不意にふわりとした感触が僕の頭をかすめたのだ。

何度も何度も触れては離れ、触れては離れる。ゆっくりとしたそのリズムに僕は恐怖した。こんな夢、知らない。こんなあからさまな変化を僕は今まで体験してこなかった。

今更、何故。

実害もなく取るに足らないと思っていたこの夢が、急に恐ろしいものになってくる。この夢の異常さが今になってはつきり感じらる。早く目覚めたい。初めてそんな思いを抱いた。

そうして白い世界に一時となる別れを告げた。

次に目を開けると自分の腕、それから机が見えた。自分の頭の下敷きになっていた腕は、とつくに痺れを訴えて感触がない。どうやら現実のようだ。

腕の訴えに逆らわず頭をあげると、本を読んでいたタカと目があつた。

「やっと起きた。狩野、もう昼だぞ」

まだはつきりしない頭はタカの言葉を怪訝に感じた。僕が覚えている記憶は2限の古典が最後だ。時間が合わない。

僕の疑問に答えるようにタカが言う。

「2限から3限まで寝てたからな。それで今昼。何、具合でも悪いのか？」

机に再び突っ伏して、僕はタカに答えを示した。

目が覚める前も覚めた後も、気分は最悪だった。頭痛こそないが体が重くて仕方がない。この土日は割りかし調子が良かったのに、今日になってこの様だ。実は僕は学校が嫌いなのかと勘ぐってしまった。

それに。先程から努めて気にしないようにしていたが、夢での恐怖を体は覚えていた。腕の痺れからではない震えが微かにしている。それをタカに見咎められなくなった。震えを落ち着かせるように腕を掴む。

「しっかりしてくれ。俺は水木ちゃんにお前のお守りを頼まれた」

「…なにそれ。水木が何だって？」

「最近お前の調子がよくないと言って心配している。なんかあったらよろしくだと。可愛い妹に心配かけんな、ダメ兄貴」

からかっているようで真剣味を帯びたタカに、僕は渋々と頷いた。

水木は僕の妹だ。今年で確か小学校高学年の仲間入りを果たした

くらいである。歳の割りにしっかりしていて、嬉しいことに僕には随分なついてくれているらしかった。普通の兄妹がどうなのか分からないが、関係は良好と言える。大切な妹だ。

家族には心配させたくない。そんな思いを僕は強く持っている。だから僕の相談を受けるのはいつもタカだ。

「また夢を見たよ」

何かあれば言えいつも催促するタカには何の遠慮もいらない。それでもこんな異常なことを口に出して人に伝えるというのは憚る。だから、さらっと何でもないように切り出した。昨日の晩ご飯はコロッケだった、というように。僕は全く気にしていない、とタカに思ってもらえるように。

とても皮肉なことに、すでにこのくらいではタカは驚かない。それくらいこの現象は日常化していた。しかし遂に隠そうとしても隠すことができなかった震えが、言葉に出ていた。

本に視線をすでに戻していたタカは一瞬こちらをちらりと見た。僕は構わずに続ける。

「頭に何か感じた。…今までとは違う。こんなこと初めてだ」

そうか、とだけタカは言った。僕が望んでいるような、極めて普通の会話での返答を模していた。それを聞いて震えがやっと引いていくのが感じられた。

「また何かあったら言え。俺は聞いてやることしかできないからな」

淡々としたタカの言葉が心地良い。

それで十分だと思った。自分一人で抱え込むより、いくら心は軽くなる。タカがいなかったら、僕はこんなに落ち着いていられない

かったに違いない。

あの子はどんなのだろうか。ふと神社で出会った彼女が思い出される。どこか危うさを湛えていて、人と一線を引いている彼女。話し掛けたくても、結局僕に話し掛けることを許さなかった彼女。

僕にとってタカのような人が彼女にもいればいいと願った。そうでなければ、彼女はとても孤独な人になってしまう。

たった1回会っただけの人をそんな風に思うのは良くないかな、と思考に一区切りを付けさせた。彼女のことを考えるのはあまりにも不毛だった。また会うかどうか分からないというのに。

それでも、また会えるとどこか確信している自分がとても不思議に思えた。

4月25日 午後02時47分

白い白衣に言い様のない眩しさを感じる。

白衣が汚れることなど、果たして高校ではあるのかどうか疑問に思う。精々美術部が油絵制作で汚すだけだろう。後は、チヨークの粉が服に付くことを嫌う教員が着て汚すだけか。

独特の生き物の匂いが生物室を覆っている。いつ来てもこの匂いには慣れない。僕はあまりこの匂いが好きではなかった。毎回生物室で授業を行うようなことがなくて良かったと心底思う。

青い炎のガスバーナーにはやし立てられて、ビーカーが音を立て始める。完全に沸騰しているのを認めてから、一人がガスバーナーを消し、一人がビーカーの中程を持った。

そんな所を持ったら熱いだろうに。無感動に眺めていると、案の定その子は金切り声をあげて手を離れた。

勢いが付いたのか、そのビーカーは机に落下することはなかった。その子は投げるようにしてビーカーを放ったのだろう、ビーカーは斜法投射の軌道を描く。推定100度と思われる熱湯がこぼれる。ガラスのビーカーは、最後まで軌道を描くことなく床に落ちてその身を砕かれた。

ビーカーの断末魔が不思議なほど辺りに響き、何人かの悲鳴のような声が聞こえた。教室中が騒がしくなる。同じ班の子が僕を囲む。

僕はただ、破片となったビーカーを見つめていた。きらきら、きらきら。蛍光灯の光を破片が反射している。

濡れた右手は痛みだけを感じている。熱さは痛みと同じ物だった。

のかと納得した。

水分を吸った包帯が少しだけ重く感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2471y/>

ハナミズキ

2011年11月17日18時58分発行